

東京に負けてなるものか

江坂 彰ほか著

プレジデント社 A5判 三四〇頁 一、七〇〇円

公園について考える職場にいる私は「公園とは」「都市とは」「緑とは」と結論の出るはずのない激論を日々職場の仲間と交わしている。

そのなかで様々な疑問が浮上してくるのであるが、そのうちの一つに「私達はエコロジ的なものかどうか」ということがある。

都市について、まちづくり、街の未来を考える際、この疑問にどう答えを出すかでかなり目標とすると、姿が変わってくるし、その姿勢が大きく違っているために、話が食い違ったり、全く話にならない、といった事態がしばしば引き起こされていくようなものである。

は、これが、さきに述べた建築家側の視点による、都市の在り方を報告するものであろうことは察していただけると思う。

『「再開発ブーム」大阪が真に復活する条件』『「脱工業化」「ソフト」に賭ける札幌の未来設計』といった標題で一都市ずつ合計二十一の都市についての未来へむけての政策が、主にジャーナリストの手によって報告されている。

横浜についても、十八頁にわたって、慶応義塾大学教授高橋潤二郎氏が語っている。

就業人口の横浜への集積について、東京は強敵であるが、みなどみらい21がその中心的役割をになう。研究開発機能を備えた地域として、臨海工業地帯を開発する中間段階として生産と結びついた研究開発を徹底的に進めること、物流機能を集積させることが必要であると説く。

五人に一人が横浜都民という現状があるが、通勤人口を横浜に呼び戻すことが自立性を確立することではない、と述べ「横浜市東京タウン」でいいじゃないか、最適成長テンポという概念を導入し、ゆるやかな成長のなかで都市開発の本番は横浜においてこれからである、と結んでいる。

他都市の政策についても、経済化、情報化といった大きな潮流にむけての大規模な戦略が報告されている。

そしてその政策のほとんどが、「東京にない文化を」であり、「東京に負けない情報集積を」であり、本書名が示しているように、「成功して、勝っている東京に、今負けている、あるいは負けそうな地方都市がどのような方法によって勝つことができるのか」が述べられている。東京が勝っているという前提があり、「東京に負けてなるものか」と意気込む地方都市が、東京追従あるいは反東京という同じ土俵の上にいる以上、勝負ははじめからついている。

これも各所で論じられていることであるが、「東京に負けるな」という命題にこたえるには、東京と戦えと言う行司を打ち据えるか、戦えといわれた土俵から降りるしかないと思われるの

であるが、本書ではいつの日かを夢みてトレーニングに励む地方都市の姿が語られている。

本書は各都市の状況を我々に提供してくれるのだろう。しかし都市をどの様な視座でとらえたらよいのかという、根源的な知の要求には十分には答えてくれそうもないように思われるのだが、それを求めるのは過剰な要求というものであろうか。

経済的繁栄、経済的安定、地球環境の保護、文化の育成等の必要性への懐疑に、ある一定の判断を下し、それに基づいて、都市の未来が論じられるべきと思うのだが、その鍵は、やはり文学や古典の中から掘り出さなくてはならないのであろうか、疑問に感じる。

△緑政局 緒賀道夫▽